

分 神田の懲りない面々

私の3・11

吉川壮織

3月11日。私は新しい職場が決まったばかりの開放感の中で体験しました。

ハローワークでのパソコン教室に向かう途中での、今まで体験したことのない大きな横揺れ。「なんだ！どうしたんだ！」恐怖を通り越して、混乱の渦中に巻き込まれた状態でした。

余震が起きている中で、団地の同じ棟の人たちの安否を確認に回った。皆が無事なことがわかると、本当に安心した。今まで、同じ棟の人々のことを考えたことなどはなかったが、地獄の境地を感じたときには周囲への関心が深まるということもよくわかりました。

その後の報道で、今に至る悲惨な状況を知ることになります。

私にとつての3・11ですが、私がこの時に新しい職場が決まっていない状態だとしたならば、どんな感覚を覚えただろうか・・・？明日への不安が募る中で、絶望的な崩壊の現実。希望という言葉が、完全に死語となつてしまつていたのではないだろうか。

生きていないことに絶望しての自死ということも考えていたのではないだろうか。しかし、この未曾有な状況で必死に生きていこうとしている人々がいるとう現実を知ると私の考えの浅はかなことが痛感したりする。

「神様は、乗り越えられないような困難は与えない」絶望を絶望として終わらせてしまつたならば、そこから先には進まない。絶望を感じたからこそ、そこを受け入れて新たな道を切り拓くことこそが必要なのではないだろうか。復興が叫ばれている現在ですが、本当の復興とは傷ついた人々が社会の構成や他者との関係が信頼できるようになつてこそ成り得ると、私は信じています。

悲しみや苦しみの共有。

私は、3・11を決起に忘れないようにしたいと思つています。私は新たな職場は決まつていましたが、3・11から全てを失つた人々もいる。喪失した悲しみや苦しみは、その当事者でなくては本当の理解はできないかもしれない。でも、本当の理解ではなく、さりげなく受け止めることも必要なのではないだろうかと今は感じるようにしている。



吉田織吉

3月11日、国際キワニスのアジア太平洋地域の年次総会のためマレーシアのメレカに滞在していました。

メレカとは昔のマラッカのことで、古くはポルトガル領でした。かのフランシスコ・ザビエルが日本に渡する前に滞在していた港町でマラッカ海峡の名前の由来の場所でもあります。首都のクアラルンプールから200kmほど南に下つた所に位置しています。この大地震と津波のニュースを知つたのは会議中に仲間の携帯にニュースが配信された時です。マグチュード8.8の巨大地震で宮城県を中心に大きな被害が出ているとこのことで、会議中ながら実際の状況と家族の安否を確認するために仲間の携帯を借りて東京の家族に電話するも一向に通ぜず、やきもきするばかりでした。会議を終え会場からホテルに戻つて、漸く電話が通じた時は既に被災後4時間を経過しておりました。電話で妻の元気な声を聞き、家族全員の無事と家並びに家財等に被害がないことを確認してほつといたしました。こう言う時は電話は頼りにならないものです。現地でもNHKのBS放送とBBCがずつと大災害の様子をライブで中継しておりましたので、東北4県並びに茨城県の地震と津波による被害が甚大な様子はつぶさに見て取れました。仙台、福島からの参加者もおられました。現地とは全く連絡が取れないとのこと大変心配されておられました。仙台の方々は帰国後もしばらくは交通手段がなく自宅に戻るまで東京で滞在された聞きました。

さて、その日の夕刻各国、各地域の代表団の懇親の場であるディナーが予定通り開催されましたが、この大災害を知つた多くの参加者から深い同情と祈りの言葉を掛けてもらいました。それと同時に誰が用意したか義援金の募金箱が各テーブルに回されたのでした。参加者の暖かい心として直ぐ様10万円を超える募金が集まり日本の代表にその場で手渡されました。また、台湾とニュージーランドの代表からは多額の義捐金の送付が約束されました。この素早い対応は意外で涙が出るほど嬉しく感動深いものでした。勿論、世界各地で大災害が起れば過去からずっと日本も義援金を被災地の仲間に通つて来ま

悲しみや苦しみは、一人の力で克服できるものではない。誰かに話し、誰かに感じてもらえる・・・私は共に分かち合える存在になりたいです。

こんな私ですが、力になれるようなことがありましたら何でも言つてください！

野村瑞枝

あの時私は練馬区役所の地下会議室で認知症のテストを受けていました。だだっ広い会場に並べられた細長の机の両端に各自座つてテスト用紙に必死に記入している時にグラグラ来たのです。あれ、何だろと思う間もなくグラグラつと本格的に揺れ出して「地震よ地震よ」と騒ぐ人がいて「そうか地震か」とやつとわかつたていたらく。でも私はこの場所は絶対安全だと物凄いいいで信じていました。何故なら20年以上前に耐震構造に問題ありという事で新庁舎建設を区長が言い出し、私たちはそんなムダなど大反対したのです。完全無視され、堂々完成した恨みの庁舎だったのです。恨みの原因は地震だったから、さあ耐震の出番だよとくとお手並み見せて貰おうじゃないか！というわけだったのです。会場の職員は女性ばかり。受験者は男が圧倒的に多く彼らはとにかくおとなしくこの事態に無言無行動で耐えていました。天上のライトの揺れ幅の大きさをアレよアレよと眺めるうちにいきなり男職員が数人バニクりながら駆け込んで来て、「上だ上だ」と声を裏がえしつつかびまべーターの止つた階段を登るなんていう無謀を押し付ける所がさすが役人根性！息も絶え絶えにやつと登りおえ玄関にたどり着いたが、地震より役人根性のほうがはるかに恐怖をもたらす事を実感しました。玄関の大型テレビで津波の早さをとくと心に刻みつけて、携帯で家族知人の安否を確認して7時頃帰宅しました。築50年以上の我が家は、夫が一人で悪戦苦闘で守り抜いていました。



高橋織丸

このたびの「憲法寄席」には、香織師匠をはじめ、講談サロンの仲間の方々にご参加いただき、心から感謝申し上げます。今回、本公演での「構成劇」と復興支援チャリティ公演での「講談&パネルディスカッション」と大変質沢な企画でした。いずれもく原発問題>をテーマにしながらも全く別建てのプログラムを企画し、当初観客の参加を心配しましたが、お陰さまで昨日は、ほぼ満席でした。

した。最も近くは日本人の滞在者も多数巻き込まれ亡くなったニュージーランド南島の大地震です。まだ余震の続く中、復興の途に就いたばかりのこの国の代表が早速多額の義援金送付の約束をしてください。本当に世界の人々とのつながりは大切にしていかなければならないとの思いを強くした一日でもありました。

いわき避難所訪問

May 02, 2011

避難者との雑談交流一日目

いわきの友人が避難所の皆さんを激励したいという気持ちをくんでくれて「神田香織ふるさと訪問－避難者との雑談交流」の機会を作ってくれた。ありがたい。

あらかじめいわきの農産物を支援している「スカイストアー」にバナナ500本を手配してもらい、徐行運転でいつもより30分遅いスーパひたちでいわき駅へ。今日の分のバナナを積み、まずは内郷コミュニティセンターへ。

ここはほとんど地元の方だ。ボランティアの人が衣類をきれいにたたんでいた。体育館など4カ所に別れている避難者の皆さんと話をしたり、ロビーで簡単な講談ワークショップ。約10名が集まり、5歳ぐらいの元気くんが大きな声でてきぱきリードしてくれ、なごやかな雰囲気。内郷御厨小学校は南相馬からの方々が。3人家族の方は「単身だと仮設住宅に入りやすいが」と。別の避難者の方が昨年の「フラおんぱく・講談教室」生徒、あやさんから「香織さん、また教室やって～」とのメールをみせてくれた。彼女は秋田に避難しているという、2年続いた湯本での講談教室、あの頃のなんと「平和」だったこと！ 好間公民館にも南相馬からの家族が。20キロ圏内の皆さんは避難所を転々とされていてほんとに苦労されているがこの家族は近所にアパートが見つかったとホツとされた様子。



旧三小体育館は段ボールでかこつてあり、きょう訪ねた中では最もプライバシーが確保されている。ボランティアのお坊さん達が出際良く炊き出し。

案内役の高木さん、いわき支援の会の同窓生淳子さんと最近再開した「だんだん」という郷土料理やで夕食。おそらくまだ汚染されてない？鰹のお刺身がおいしくて感激でした。

May 03, 2011

2日目

4月11日と12日震度6弱で我が家は壁やタイルがはがれ、塀はますます傾き、2年前に建てたアパート3棟は傾いて居住者に退去してもらっていた。

前回訪ねたのはたまたま4月10日。この日は通行できた岩間と小浜はやはり4月の地震で土砂崩れで不通、近所のサンマリーナはヨットが棧橋に乗り上げたり、腹をみせてひっく

り返ったり…、なにより驚いたのは天然鵜でおなじみの照島が崩れて三角に！疲れると景色をみてぼーとしてた私の癒しの場所の惨状。

幸い家族は元気だが「もう一度大きいのが来るそうだ」と母。隣の家は取り壊すそうだ。我が家は築40年。酒飲み棟梁が「時期がくれば丈夫さが分かる」と言っていた通りまだまだ住めそうだ。棟梁ありがとう！きょうは地元の泉公民館へ。ここでは度々講演した。連休ということでほとんど外出。北茨城から知り合いが避難していた。地震が恐くてひとりではいられずここへきたそうだ。

勿来公民館は地元の講談「安寿と厨子王物語」の初演の開場で思い出が沢山。ここではボランティアの炊き出しで、バーベキューをしていた。連休中は大勢のボランティアがいわきを訪れたそうだ。ありがたい。勿来地区は4月の地震で避難している地元の人が多いようだ。

4月の地震では新しい断層が2つも出現、温泉が湧き出た所もある。勿来の森パークセンターはできたばかりの立派な体育館。ロビーでは児童劇が。ここで発声などみなさんと交流。最初は疲れた様子でも、声を出すうちに顔に朱がさし、最後はみなさんと立ち上がりお腹の底から声をだしてくれた。ご主人が私の幼なじみという女性と話す。地震がこわくてパニック症になり、運転ができなくなってしまったそうだ。今はすこしずつ練習しているとか、そばにいた10代の息子さんに「母ちゃん、頼むね」といったら「おれがいるから大丈夫」と、たのもしい。

最後の汐見が丘小学校、体育館ではお年寄り達がマッサージを受けていた。小学校では校庭遊びを禁じているという。なんということだ。こどもにとってそれは拷問に近い。いわきは放射線が比較的低いことから、計りながらなんとかならないのだろうか。小雨がぱらつく肌寒い中、帰りの「ひたち」に乗り込んだ。2日間でじっくり数名の方々と話すことができた。中には子どもの環境をめぐって離婚寸前のけんかをしている夫婦もいる。建てたばかりの家にもどれない20キロ圏内の人たち、どの家族も原発事故が重く影をおとしている。まったく終息しない、かろうじて悪化を防いでいるだけの状態はいつまで続くのだろうか…。



昨日の香織師匠の講談「チェルノブイリの祈り」は観客のみなさんは、被災地に思いを馳せながらも冒頭の枕で爆笑し、その後の本編の講談では多くの人がまんじりともせず感動して聞き入つておられました。

そしてエピソードでの福島第一原発事故のメルトダウンでは、私は（以前は恐怖の戦慄を感じた場面でしたが）、今回は怒りと悔しさを禁じ得ませんでした。

第2部のパネルディスカッションでは、大西赤人氏の進行で時間を忘れるほど議論が盛り上がり、途中で終わらねばならなかったのが残念でしたが、とても内容の濃いい討論でした。

香織師匠の、原発推進・改憲推進派の某政治家を200万年後まで地下何千メートルまで原発廃棄物とともに石棺すべきでは、の爆笑発言は大いに会場を沸かせました。こうしたジョークは、不謹慎ではなくとても大事だと思いました。

実は、私が夢に描いてきた「憲法寄席」はドイツのカバレット（フランスのキャバレー、いわゆる政治文化寄席）では、こうした風刺と笑いが伝統的に受け継がれています。日本人はすぐに情緒的に「オー!ルジャパン」になってしまい、異質な発言や笑いや風刺を不道徳的と見なし、最後は自分の命すら犠牲にしての神風、特攻隊になってしまいがちです。ドイツのメディアでは、原発の事故処理に当たっている日本の労働者が危険な労働を拒否せず命がけで立ち向かっている姿をみて、「原発神風」「原発特攻隊」と呼んでいるそうです。

敗戦後、自国の戦争責任をあいまいにした日本人が、ふたたび原発責任を「一億総懺悔」論であいまいにしてはという気持ちです。

（一方、3・11以降、自省をこめた自己への問い直し、問いかけもなく、相変わらず自分の土俵から一歩も出ようとせず、他者の発言に耳を傾けない自己中心的で自己宣伝的な「活動家」の言にも少々辟易しておりますが。）



田中伸織

311の後も、悪党ども（法務官僚、



自民党民主系系の国会議員知事ら及び経団連）は、相変わらず、否、地震・津波・原発を奇貨として益々、人々の権利を抑圧し、同時に、己らの権力を増すことに躍起である。その視覚的な象徴が、「がんばろう日本」というスローガンの氾濫だ。見えにくいところでは、ウイルスを作成しただけで（送付したりしなくても）犯罪を成立させる法案が、既に衆議院を通過した(9月12日現在)。これが法律になれば、警察は誰に対してでも、「おまえ、ウイルスを作つただろう」とイチヤモンを付けて、家宅搜索、パソコン所持品押収、逮捕を自由にできるようになる。

加えて、㊦の天災を天罰呼ばわりした石原知事は、ダントツで都知事再選を果たした。新銀行東京で大穴をあげ、ナンセンスなオリンピックク立候補でも失態を晒したこの男、しかも、被災地の人々の感情を踏みにじる「天罰」発言をやつてのけたこの男を、

圧倒的多数のシラフの成人が支持したのだ。私は、

ナショナリズムの煽動や悪法成立には、「法務官僚や右翼議員の本性だからな」と或る程度納得はするが、

石原圧勝には、暗澹たる思いがする。

「天罰、か…。「有事法制を通した小泉の自宅に自衛隊の戦闘機が墜落した」とか、「教育基本法を廃止(一)した安倍首相の膝元で原発が大爆発を起こした」というのが、真つ当な「天罰」だ。加えて、あろうことか、チェルノブイリ原発事故を芸術作品の域まで高めて講談で啓発している神田師匠の地元たる福島で、原発が大暴走してしまうとは、…。「天罰」を下す神様なるものが居るとすれば、そいつは、よほど、底意地の悪い奴だ。他方、私の個人の次元では、

㊦を機に初めて、原発のとんでもなさを思い知つた。これは、『チェルノブイリの祈り』を聴いてはいても、骨肉化していなかったことの告白であり、慙愧の至りだ。しかし、原発の水素爆発・メルトダウンを契機に、高木仁三郎さんの遺著『市民科学者として生きる』『アルト・ニウム』の恐怖」を初めて読み、

更に、物理を猛勉強したことは、貴重な成果だ。彼の他界後十余年で著書を読むとは、これまた慙愧の至りだが、核分裂爆弾・核分裂発電の危険性・非人道性に目覚めた今の私に、最早、後戻りはない。

トチ狂つた「天罰」を下すアホな「神様」など何するものぞ、である。